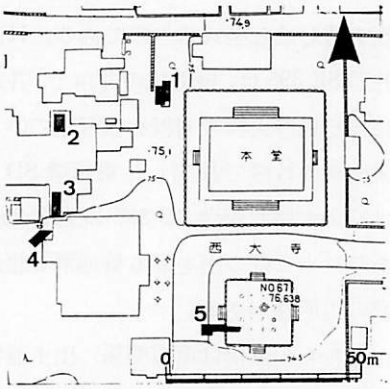
平城京内寺院の調査

平城宮跡発掘調査部

1. 西大寺境内の調査

本坊地区の調査　西大寺本坊の改築に先立つ事前調査を4ケ所でおこなった。第1区の北半は近世の土壙で破壊されていたが，南半において表土下50 cmの地山上で奈良時代の柱穴3個を検出した。掘形はいずれも径約1 mで比較的大きく建物か塀かは確認できないが，配置からみて構造物2基分と考えられる。これらは東西塔の北側，伽藍中軸線付近にあるので，西大寺の伽藍が整った神護景雲年間 (767～770) 以前のものであろう。第2区では中世土壙を検出したにとどまる。第3区下層では奈良時代の南北溝と土壙を検出した。ともに奈良時代中頃の土器が出土しており，西大寺創建以前の宅地に関わる遺構であろう。南北溝は右京一条二坊十一坊の東西2分線の西約10 mに位置するが，西肩を確認しただけで規模は不明である。第3区上層では室町時代の遺構を検出した。北端では整地盛土の上に石組東西溝が，南側では下層とほぼ同じ位置に南北溝が作られる。南北溝から円形の三彩棰先瓦が出土した。第4区では上層で江戸時代の池が検出され，下層では奈良時代の包含層が確認された。第1区の地山面は他の調査区に較べて0.7～1.32 m高く，寺造営以前の旧地形は東から西に向って低くなっていたことがわかる。



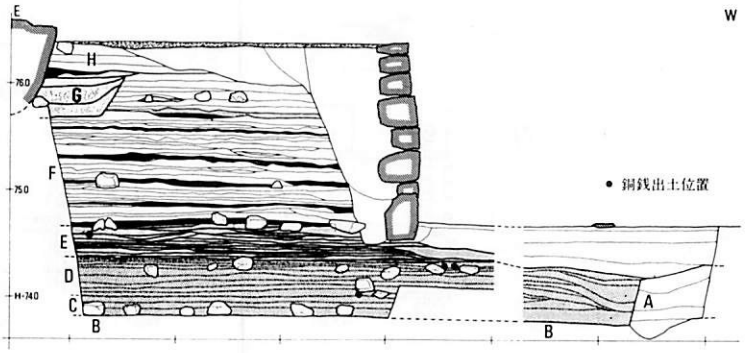
調査位置図

東塔基壇の調査　本調査は，西大寺が計画した東塔基壇外装の修理工事に際して行なった。西大寺の東西両塔は，昭和30年に大岡実・浅野清両氏が調査し，当初八角七重に作る計画で工事を進め，途中で四角五重に変更したとする『日本霊異記』の記載が事実であることを確認している。しかし，計画変更前に八角形基壇の築成がどこまで進んでいたかは不明であった。そこで，工事のため西面する基壇化粧石が一部除去されたのを機に，西階段の南2 mの位置に，基壇の西に接した発掘区を設け，さらに基壇を断ち割り，その築成情況を精査した。

遺構と遺物　現地表下0.5 mで塔造営時の地表面に達する。発掘区西端では，その下が奈良時代の整地土A・赤褐色バラス混り土の地山Bとなる。地山を掘り込んだ南北方向の溝が1条あり，奈良時代前半の土器が出土した。基壇の築成工程は以下の5段階に大別できる。

(1)旧地表面から，地山上面に至るまで深さ0.5 mの掘込地業を行なう。掘り込みの肩は現基壇西端の西5 mに位置する。底に河原石をまばらに置いた後，約0.5 mの厚さに版築を行なう。版築層は2～14 cmの厚さで11～12層積み上げ，最上層が掘込地業の外に若干はみ出す。築土はやや軟弱で，下半部が灰褐色土C，上半部が玉石・土器片・炭を多く含む黒灰色土Dである。築土Dの最下部で1点，最上部で2点の銅銭 (銭文不明) が出土した。(2)続いて厚さ0.9

m の版築を行なう。築土Eの及ぶ範囲は現基壇より広いが，西限は後世の攪乱により確認できなかった。しかし，地業西端から内側1.3 cm の範囲には及んでいない。版築層は2～6 cm の厚さで11～15層積みあげ，最上面は河原石の石敷面をなす。各層は非常に硬くつき固められ全面に突棒の跡が検出された。築土は暗茶褐色土で土器片を少量含み，最上層の下面で銅銭（銭文不明）が1点出土した。土器には小型双耳瓶が1片あり，坂田寺第3次調査で検出した基壇建物の須弥壇鎮壇具に含まれるものと類似する。(3)さらに厚さ 1.4 m の版築を行なう。築土 F は築土 E に比べやや軟弱で色が白い。版築層は 2～8 cm の厚さで，27～37層積み上げており，7小工程に細別できる。各小工程による築土は 20 cm 程度で，小工程間には暗褐色の間層が入る。築土下の上面より 0.2 m 下に玉石列を置く。(4)深さ 0.4 m の礎石据付け穴 G を掘り，根固め石を置き礎石を据付け穴を埋める。埋土最上部の濃茶褐色炭混り土の中から和銅開珎片1点・土師器片・竈片が出土した。(5)さらに築土Hを積み上げ土壇部分の築成を完了する。なお，現基壇化粧は裏込めに用いた多量の瓦の年代から，地覆石が室町時代以降，それより上部が江戸時代末期以降に築かれたと考えられる。



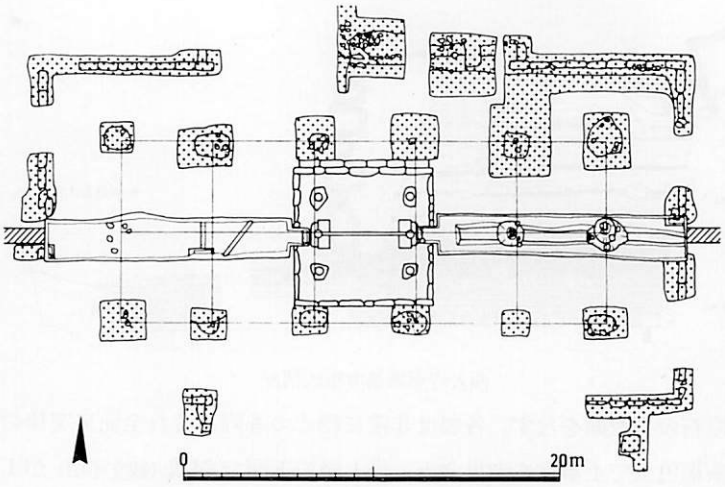
西大寺東塔基壇築成情況

まとめ　築土 E と築土 F とは積み方・色調ともにかなり異なり，一連の作業によるものとは考えにくい。現階段は基壇本体とは別の築土で，築土 E の土に載る。そこで，工程(2)までを当初の八角形基壇築成の仕事と考える。工程(3)以降が計画変更後の仕事で，築土・礎石ともに創建時のものである。また，鎮壇具の投入は計画変更前に最低3回，変更後も最低1回行なわれており，土師器片・竈片の出土は鎮壇具の投入に際し，こうしたものを用いた行為が伴ったことを推測させる。

2. 薬師寺南門の調査

薬師寺が計画した現南門周辺の環境整備に伴う事前の調査であり，現南門の東西の築地塀復原予定地（第Ⅰ区）と，売札所移転予定地（第Ⅱ区）との2カ所を対象として実施した。

第Ⅰ区　調査地は創建南大門にあたり，棟通りの礎石位置確認のため，現南門の東西に調査区を設定した。創建時の基壇の築土は現築地塀の下のみに残り，周辺では削平されていた。棟通りの礎石位置については，東から1・3番目の柱位置では礎石据付け痕跡，6番目では植物の細根による攪乱のため根石のみを確認した。5番目では，礎石抜取りに際し根石も取り去られていた。現南門の棟通りの礎石は，創建南大門の礎石を原位置のままで，西では西側を，

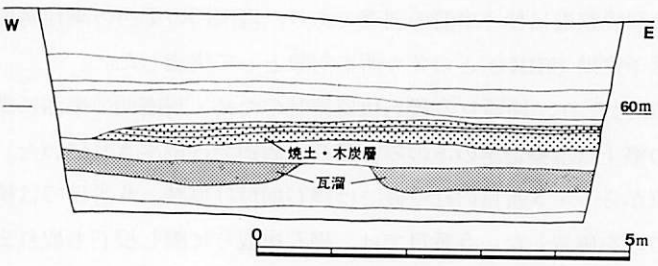


薬師寺南門調査遺構図（網目は1954年調査区）

東では東側を若干打ち欠いて再利用していた。創建南大門の規模は，中央3間が18尺，東西の間が16尺とする従来の調査成果と一致する。礎石の据付けは，礎石据付け穴を掘らず，基壇版築途上に根石で固定し，さらに基壇版築を続行する工法によっている。築土は1層5～10 cm で版築の仕事は比較的粗い。築土に創建瓦が若干量含まれ，南大門の創建は薬師寺の造営が始まった養老2年(718)よりも若干遅れると考えられる。『薬師寺縁起』に記載する仏門（南大門）の寸法（長5丈広3丈2尺）を，天禄4年(973)火災以後の再建南大門の規模とする説もあるが，本調査ではそのような痕跡は確認できなかった。

第II区　現南門の東北東，回廊と築地にはさまれた場所で，宿直屋の存在も考えられたが確認できなかった。調査区では，現地表下 270 cm で砂質の地山になる。地山上 20 cm は植物質を含む沼状の堆積で，薬師寺造営直前のこの地域の状態を示す。ここから約 20 cm の角釘7本がまとまって出土した。この堆積上に約 60 cm の盛土がある。薬師寺創建の際の整地土であろう。この整地土を掘り込んで瓦溜がつくられる。ここからは，軒瓦約300点を含む多量の瓦塼類・加工のある凝灰岩片・三彩陶器片・土師器片が出土した。瓦溜の上に約 30 cmの盛土整地が行なわれる。その上に木炭まじりの焼土層が堆積し，これは天禄火災の整地により形成されたものであろう。ここからは29点の軒瓦と巡方帯金具を表わしたと思われる土製品が出土した。実際の巡方よりひとまわり大きく，金箔を押した痕跡も認められ，塑像の帯の部分と考えられる。焼土層から上は，廃棄した瓦を主体とした整地層で，順次現代に至っている。

瓦層から出土した軒瓦は，約80％が本薬師寺式，約15％が平城宮系のものであり，平安時代の復古瓦を少量含んでいる。道具瓦には完形の隅木蓋瓦がある。おそらく，創建南大門の隅木を飾っていたものであろう。　（岩永省三）



薬師寺南門東土層図